

植物珪酸体による海辺の古植生復原

Paleohabitat of coastal plants reconstructed from the number of fossil opal phytolith assemblages

江口 誠一 [1]

Sei-ichi Eguchi[1]

[1] 千葉中央博

[1] none

植物珪酸体化石群の組成とその産出量によって、過去の砂浜海岸地域の植生と地形を空間的に復原するための基礎研究を行ない、縄文時代晩期の三浦半島古逗子湾奥海岸の堆積物についてそれを適用した。国内6地域(温根沼, 鶴川河口域, 六ヶ所, 追良瀬川河口域, 秋穂二島, 小櫃川河口域)において、現生海岸植物6種(コウボウシバ型, ハマニンニク型, ケカモノハシ型, チガヤ型, ヤマアワ型, ヨシ型)の被度と表層堆積物中の植物珪酸体分布を対応させ、分類した8微地形区(前浜, バーム, 砂丘, , , 湿地, ,)ごとにそれらの最高拡散量を平均値化した。その数値と植物珪酸体化石各型の産出量の対比によって推定された母植物生育域と堆積域を、成帯構造を呈する植生と地形に置換して空間的に復原した。古逗子湾奥海岸において約2800年前に海退傾向であったが、以降少なくとも約150年後まで海進傾向に転じたことが確認され、地震後の逆戻り現象と考察した。陸域堆積物中の化石から直接的に海水準変動と地殻変動の知見を初めて得た。